

《ピウスツキ特集》

ブロニスワフ・ピウスツキと 二葉亭四迷

沢田 和彦

ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)が日本を訪れたのは、1902(明治 35)年8-9月、1903年7-10月、1905年10-11月、そして1905年12月中旬-1906年8月3日の都合4回で、彼はわが国で実にさまざまな人々と交渉を持った。例えば亡命ロシア人・ポーランド人革命家、孫文、宋教仁、黄興のような中国人革命家、ジャーナリストの横山源之助、松田衛(まもる)、鈴木於菟平(おとへい)などの東京外国語学校露語科関係者や、上田将(すすみ)、軍司義男、高井万亀尾(まきお)のような日本ハリストス正教会の神学校の出身者、片山潜、幸徳秋水、堺利彦、加藤時次郎、石川三四郎、阿部磯雄などの社会主義者、政治家、鳥居龍蔵、坪井正五郎のような民族学者や関場不二彦、村尾元長、神保小虎といったアイヌ研究家、下田歌子、雛田(ひなだ)千尋のような女性教育者、今井歌子、遠藤清(きよ)などの女性社会運動家、女流音楽家の藤井(三浦)環(たまき)と橘糸重(いとえ)などである。名前が判明している日本人だけでも優に百名を超える。ここではそのなかでも最も親しい関係を結んだ二葉亭四迷との交流について紹介しよう。

1906年初頭、ピウスツキは東京で二葉亭四迷、本名・長谷川辰之助のもとを訪ねた。二葉亭は1904年から大阪朝日新聞社東京出張員となっていた。彼は文学の世界に踏み込んでからも対露政策に関心を持ち続け、ロシア革命派への関心を強めつつあった折にピウスツキに出会ったわけで、ピウスツキに物心両面で惜しみなく援助を与え、さまざまな人々に引き合わせた。二人はほとんど毎日行き来し、短時日のうちに極めて親密な間柄となった。二葉亭はピウスツキについてこう述べている。

「▲現に自分の知って居る露人中に斯様の人物が一人居る。西比利亚で苦役に服し、今は四十才位であらうか、未だ家をなさない。而もアイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。▲さらば御當人はと言へば、囊中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さえ継

さわだ・かずひこ 1953年大阪府生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了、文学博士。現在、埼玉大学教養学部教授。著書に『白系ロシア人と日本文化』(成文社、2007)、『日露交流都市物語』(成文社、2014)など。



げば、夫れで充分だ、どうしてもアイヌの如き憐むべき人種を保護しなければならぬと考えて居る。▲局外から見れば、実に馬鹿げて居るやうだが、其のあどけない真面目の態度が、吾々の同情を惹く所である。」

まもなくピウスツキは二葉亭を見込んで、革命党の資金作りのためにニコライ・ラッセルがハワイに持つ邸宅農園の売却に協力してほしいと頼んだ。ラッセルは日露戦争時に日本に送られたロシア・ポーランド俘虜兵士に革命思想を鼓吹する目的で来日した亡命ロシア人革命家である。二葉亭は張り切ってピウスツキとともに『毎日新聞』社主・島田三郎、大隈重信、女子教育で名高い巖本善治、板垣退助らを訪ねた。この要人訪問はいずれも不成功に終わったかに見えたが、それがラッセルの土地売却のためというのは名目上のことで、実は日本政府が亡命ロシア人・ポーランド人革命家をロシア政府に引き渡すつもりかどうかを打診するためのものだったのである。この年の春にロシアは日本に対して、政治犯を含む犯罪者引き渡し協定の締結を申し入れていた。打診の結果は、その恐れはないであろうというものだった。まもなく二葉亭は革命派の運動に冷淡になっていったが、ピウスツキとの交際は変わりなく続いた。二葉亭は彼の「年を取った小児」のような人柄を愛したのである。帰国が決まった時、「イの一番に尋ねたのは、長谷川君の家で、二十幾貫の大男が飛びついて、潜々(はらはら)と涙を出して、君に喜悦を分つた」という。

ピウスツキに文学の素養があったことも、両者の交遊を途切れさせなかった一因だろう。ピウスツキと二葉亭は日本・ポーランド協会を設立し、両国の

交流をすすめるために、「先づ一番容易で、一番故障の少ない文学」の翻訳、紹介を取り上げることにした。ピウスツキはガリツィア(オーストリア領ポーランド)に戻った後、クラクフでシェロシェフスキ、ワシレフスキ、シマンスキといったポーランドの代表的作家、批評家に自作の推薦やその露・独・仏・英訳の寄贈を求め、それらを二葉亭に送ってきた。東京に日ポ協会付属図書館を設けるためである。そしてこれらの作品の日本への紹介を二葉亭に繰り返し依頼した。

そのうち二葉亭が訳出したのは、ネモエフスキの散文詩『愛』と自然主義作家プルスの『棕のミハイロ』である。『愛』は革命家の心境をシンボリックに歌ったものであり、『棕のミハイロ』は二葉亭の翻訳中、乞食や無宿人のような社会の最下層の人間を扱った作品群に属する。後者はマリア・ジャルノフスカ送付のロシア語訳からの重訳である。ピウスツキはガリツィアに戻った後、幼馴染みの人妻マリアと一時期一緒に暮らした。これらの翻訳は女性解放運動家・福田英子の雑誌『世界婦人』に発表された。そして同誌はあたかも日ポ協会の機関誌のような役割を果たすようになった。1906年2月に二葉亭を福田に紹介したのはピウスツキである。

一方二葉亭も1907年、ピウスツキに森鷗外の『舞姫』と木下尚江の長編小説『良人の自白』のそれぞれ英語版を送った。だが前者は日本文学の特徴が表われていないという理由で取り上げられず、後者のみがポーランド語に翻訳されたようだ。

宿願かなって二葉亭がペテルブルグの月刊誌『ロシアの富』に寄稿することになるのも、ピウスツキとマリアの斡旋による。同時に二葉亭自身の小説のピウスツキによるポーランド語訳を、ポーランドの『スフィンクス』誌に寄稿することも決まった。だが二葉亭は結局いずれの雑誌にも原稿を送らなかったようだ。

二葉亭は1908年夏に『朝日新聞』特派員としてペテルブルグに赴き、そこでマリアに会うが、ピウスツキとの再会はならなかった。翌1909年6月1日にピウスツキは、次のように始まる手紙を二葉亭に書いた。

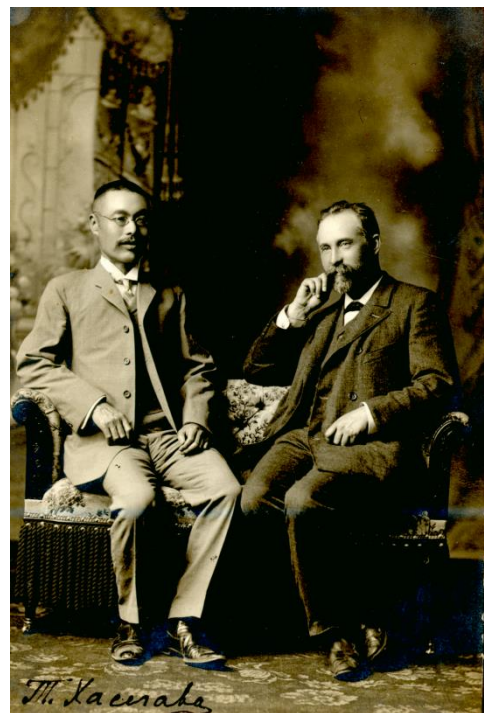
「深く尊敬する親愛なる長谷川さん あなたの発病と突然の帰国を妻から知り、悲しくて堪りません。これでこのヨーロッパでお会いできなくなりました。それを私は心から望んでいたのですが。」

だがこの時点で二葉亭はこの世の人ではなかった。同年2月に二葉亭はウラジーミル大公の葬儀に参列して風邪をこじらせ、肺炎と肺結核を発症し

た。そして5月10日、船で帰国の途次、ベンガル湾上で死去したのである。ピウスツキは1910年に「シギ 長谷川」と題する二葉亭の追悼記事をポーランドの雑誌『世界(シフィアト)』に発表した。以下にその一部を紹介する。

「彼〔長谷川〕の死とともに、ポーランド語をマスターし、直接ポーランド語から日本語に翻訳ができて、人種的、地理的には遠いが、多くの点で互いにきわめて近い二つの民族の間の精神的な絆を保つことができる作家を日本で短時に獲得する、という望みは消えてしまった。長谷川はロシア語がとてよくできたので、少なくともポーランドの作家の作品を原文で読む程度には、大した苦勞もなしにポーランド語を習得することができただろう。〔中略〕わが民族に対して心からの友情をいただき、それを行動によって証明しようとした気高い人物の逝去を、私は心から悼む。」

なお筆者はこれまでに以下の2点を編集、刊行した。
A Critical Biography of Bronislaw Pilsudski
 [Preprint]. 2 vols. Edited by Kazuhiko Sawada and Kōichi Inoue. Saitama, Saitama University, 2010, ii+8 illust.+490 p.; 8 illust.+498 p.
 『ポーランドの民族学者ブロンニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』沢田和彦編(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書, 5)埼玉大学教養学部・文化科学研究科, 2013.3, 131頁



二葉亭とピウスツキ(1906年6月19日、東京・本郷の中黒写真館にて)